

修士論文(要旨)

2011年1月

対人コミュニケーションにおける笑いの機能
—20代・同性・日本語母語話者ペアの自然会話データをもとに—

指導 堀口純子 教授

国際学研究科

言語教育専攻

207J4001

青島絵里

目次

第1章 研究の背景と目的	1
1.1 研究の背景と目的	1
1.2 研究の目的と意義	1
第2章 先行研究	3
第3章 調査の方法	9
3.1 データ収集の方法	9
3.2 スクリプト作成の方法	10
第4章 分析と考察	
4.1 分析の方法	18
4.2 笑いの数と割合	19
4.3 ラベル付の一致率	24
4.4 音声の笑い	24
4.5 表情の笑い	36
4.6 機能同士の繋がり	45
第5章 まとめと今後の課題	48
謝辞	
参考文献	i
資料	
1 「笑い」ラベル付け用シート	I
2 自然会話データ	i-1
F1a-F1b	i-1
F2a-F2b	i-13
F3a-F3b	i-24
M1a-M1b	i-36
M2a-M2b	i-48
M3a-M3b	i-61

要旨

本研究では、コミュニケーションにおける笑いの機能を、音声の笑い、表情の笑いの両面から明らかにすることを目的とする。

20代・同性・日本語母語話者どうしの男女ペア6組(女性3組、男性3組)の10分間の自然会話の録音録画したものをデータとして使用した。

笑いを音声の笑いと言情の笑いに分け、早川(2000a)を基に、話題の領域が自己の領域、相手の領域、両者の領域のどの領域に当てはまるかに着目し分析を行った。その結果、音声の笑いでは7項目、表情の笑いでは6項目の新しい笑いの機能を発見した。

音声の笑いから説明する。まず、早川(2000a)の「A: 仲間づくりの笑い」では、自己領域の「A-1: 共有期待の笑い」、相手領域の「A-2: 共有表明の笑い」、両者の領域の「A-3: 共通認識確認の笑い」の3項目であったが、新たに自己領域の「A'-2: 共有表明の笑い」、相手領域の「A'-3: 共有期待の笑い」の2項目を発見した。次に、早川の「B: バランスの笑い」では自己領域の「B-1: 恥・照れによる笑い」、相手領域の「B-2: 厚かましさによる笑い」、「B-3: 礼儀的笑い」の3項目であったが、自己の領域の「B'-2: 深刻な話題を緩和させる笑い」と、「B'-3: 自慢を和らげる笑い」の2項目を発見した。そして、早川の「C: 覆い隠すための笑い」では、自己領域の「C-1: ごまかしの笑い」と「C-2: とりあえずの笑い」の2項目であったが、相手の領域を設定し、「C'-3: ごまかしの笑い」「C'-4: とりあえずの笑い」の2項目を発見した。最後に、「D: 個人内コミュニケーションの笑い」という、相手の有無にかかわらず、自己の内に原因がある笑いや、その後の会話の展開上で笑いの機能が果たされていないと感ぜられるものを発見した。

表情の笑いでは、音声の笑いでも新たに発見した機能、「B'-2: 深刻な話題を緩和させる笑い」が見られなかった。出現数で見ると、音声の笑いよりも、表情の笑いの方が圧倒的に多く見られるが、機能は出現数の少ない音声の方が多様であることが分かった。

また、同じ笑いで別の機能を同時に果たす機能同士の繋がりでは、音声の笑いは女性ペアの方が機能同士の繋がり強く、表情では男性ペアの方が機能同士の繋がり強いことが分かった。音声・表情・女性・男性共に、「A'-1: 共有期待の笑い」と「B'-1: 恥・照れによる笑い」の繋がりが強かった。ここから、自己のプライベートは失敗談など、恥ずかしい事柄を笑い話と披露し、仲間意識を強めるといふ機能が多用されることが分かった。

今後の課題としては、笑いの機能をラベル付けする際には、意図と機能を同時にラベル付けすることと、笑いと言情、バックチャンネルについて明らかにすること、領域の分け方を検討することの3点が挙げられる。

主要参考文献

[邦文]

- 大橋理枝・根橋玲子(2007)『コミュニケーション論序説』放送大学教育振興会
- 神尾昭雄(1992)『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析』大修館書店
- 桐田隆博・遠藤光男(2003)「面接場面の笑い—笑いながら話す現象(laugh-speak)とその機能」
『電子情報通信学会報告書. HIP, ヒューマン情報処理』102(734), 社団法人電子情報通信学会, 13-18.
- 志水彰(1994)「いろいろな笑い いつ、どこで、どうして笑うの？」志水彰・角辻豊・中村真(1994)
『人はなぜ笑うのか』第2章, 講談社, pp.43-66.
- 立野由加里(2008)『ストレス状況に対するユーモアを用いた認知変容の検討』 桜美林大学
大学院 国際学研究科 修士論文
- 早川治子(1997a)「日本人の『笑い』の談話機能—2-出現率と場面」『言語と文化』第9号, 文教大学言語文化研究所, 97-109.
- 早川治子(1997b)『『笑い』の意図と談話展開機能』『女性のことば 職場編』第8章, ひつじ書房,
pp. 175-196.
- 早川治子(1999)「自然言語データにおける『笑い』の数量的基礎分析」『言語と文化』第12号, 文教大学言語文化研究所, 38-64.
- 早川治子(2000a)「相互行為としての『笑い』—自・他の領域に注目して—」『文学部紀要』14-1号,
文教大学文学部, 23-43.
- 早川治子(2000b)「『笑い』の分類に基づく数量的分析」『文学部紀要』, 14-2号, 文教大学文学部, 1-24.

[欧文]

- Birdwhistell, R. L.(1970)『Kinesics and Context :Essays on Body Motion Communication』
University of Pennsylvania Press
- Jefferson, Gail(1979)「A technique for inviting laughter and its subsequent
acceptance/declination」In G. Psathas (Ed.) *Everyday language: Studies in
ethnomethodology* (pp.79-96). New York, NY: Irvington Publishers.